

## 論文要約

### 付加疑問の相互行為的機能についての一考察 —コミュニケーション上での言語の働きについての一端—

木村 英莉子

本稿の目的は、ドイツ語の付加疑問の相互行為的機能を明らかにすることにより、コミュニケーション上で相互行為的機能が表出される仕組みと、言語がコミュニケーション上で果たす役割の一端を明らかにすることである。

言語がコミュニケーション上で表出する意味は、語義的意味にとどまらない。コミュニケーション上で人は、対話相手と相互に発話を行うことによって何らかの行為を行っており、発話はその場で達成する行為に鑑みて行われる。また、意味表出にはさまざまな非言語要素（文脈、状況、ジェスチャー、視線、笑いなど）が影響する。これにより、コミュニケーション上では、語義的意味以上の意味、すなわち相互行為的機能が表出されるのである。

コミュニケーションツールの一つである言語について解明するには、この相互行為的機能について論じ、明らかにする必要があるであろう。相互行為的機能は、語義的意味と全く関連性なく表出されるわけではなく、語義的意味から産出されると考えられる。この語義的意味と相互行為的機能との関係性について分析することにより、相互行為的機能が表出される仕組みを解明することができる。相互行為という観点から言語表現を分析することにより、新たな視点から言語の表出する意味について明らかにすることができるであろう。

本稿では、相互行為的機能が表出される仕組みと、言語がコミュニケーション上で果たす役割について明らかにするために、個別の言語表現の分析を行うというボトムアップ式の手法を取る。本稿で考察対象とするのはドイツ語の付加疑問である。ドイツ語の付加疑問とは、反応要求（同意要求、確認要求）を行う、発話末に付与される不変化詞で、例えば発話末の *oder*、*ne*、*gell* などが当たる。ドイツ語の付加疑問については従来、反応要求を行う不変化詞と分類、定義されてきた。しかしながら実際のコミュニケーション場面を見ると、付加疑問はその意味機能である反応要求を必ずしも行う必要がない場面でも使用されている。したがって、語義的意味以上の相互行為的機能が表出されていることが想定できる。

ドイツ語付加疑問の相互行為的機能について論じられ始めたのは 2000 年代になってからであるが、まだその数は少なく、十分に論じられてきたとは言えない。また、実際の会話では、付加疑問が使用され得る発話状況であるにもかかわらず、付加疑問が使用されない場合もあるが、先行研究ではこういった、付加疑問が使用されない場合との比較は行われていない。同じ位置にあるが付加疑問が使用されない場合との差異に、付加疑問が表出する相互行為的機能の特徴が存在すると考えられるため、本稿では、付加疑問自体の分析とともに、同じ位置の他の言語表現との比較も行うことにより、付加疑問の相互行為的機能をより詳細

に明らかにする。

ドイツ語付加疑問には、例えば *oder*、*ne*、*ja*、*gell* など、同じ語義的意味である「反応要求」を持つ複数のヴァリエーションが存在する。個別ヴァリエーションの間には方言差が指摘されているが、実際のコミュニケーション上では一人の話し手が複数のヴァリエーションを使い分けており、その使い分けの要因と個別ヴァリエーションの差異は明らかになっていない。

本稿ではしたがって、付加疑問の相互行為的機能と個別ヴァリエーションの差異を解明する。分析に際しては、付加疑問が使用された発話を、その発話状況から分類し、それぞれに関して付加疑問が使用された発話自体の分析を行うとともに、同じ位置にある他表現との比較を行う。付加疑問全体に通じるこれら相互行為的機能について明らかにした上で、個別ヴァリエーションの差異と使い分け要因について分析する。なお、本稿で考察対象とする個別ヴァリエーションは、データ中に出現した *oder*、*ne*、*ja*、*gell*、*hm*、*weißte (weißt du)* である。

考察手法として使用するのは会話分析である。相互行為的機能は、話し手が対話相手と共に発話によって何らかの行為を行う中で、非言語要素に影響されて表出される。コミュニケーション上ではさまざまな種類の非言語要素が常に存在し、いつでも、どの要素でも使用することが可能である。このため、相互行為上で何が起きているのかを正確に分析するには、その場で行っている行為と相互行為の中で生じたすべての要素を記述し、分析に加える必要がある。このため、本稿では考察手法として会話分析を使用する。会話分析は相互行為の構造を解明することを目的とする研究手法であり、実際の会話データを対象に、相互行為という観点から発話の記述と分析を行う。また、言語・非言語要素を書き起こして記述するトランスクリプション記号を持ち、非言語要素の記述と分析を行うことができる。本稿では会話分析を用い、実際の会話を分析することによって、相互行為的機能を解明する。分析するデータは、本稿執筆者が 2016～2017 年に収録した、ドイツ語母語話者同士の二者会話で、20～30 分の会話 12 本分、約 6 時間である。

データ中で付加疑問が使用された発話の発話状況は、対話相手の発話に対して反応を返す「反応提示」、すでに提示された反応や、提示されるべき反応をさらに提示するように要求する「反応追求」、前発話から予想される、期待されるような反応が提示されず、代わりに提示された異なる種類の反応である「期待されない反応」、そしてストーリーテリング（経験語り）や事物の叙述など、比較的長い発話を行っている最中である「説明中」、そしてこれらの発話状況以外の「その他」の五種類に分類された。分析の結果、表出される相互行為的機能はそれぞれ発話状況毎に以下のような結果となった：「反応提示」での付加疑問は「対話参加者間の「共有」を志向し、エンパシー的共同性提示」を行う。「反応追求」での付加疑問は、「共同性の構築と対立関係の解消」を行う。「期待されない反応」に際しての付加疑問は「共有を提示し、対話相手との対立関係を解消」する。そして、「説明中」の付加疑問は「対話相手の理解の手助けと説明の構成の管理」を行う。この考察結果から、付加疑問の

もつ相互行為的機能は、「共同性の提示」であると明らかにした。

また、個別のヴァリエーションの特徴は以下の通りである：oderの特徴は、(i) 対話相手からの応答を重視する、(ii) 「共有」を明言する、(iii) 対話相手への「寄り添い」を表明する、である。neの特徴は、(i) 共感的態度を示す、(ii) 不確定な内容に付与される、である。gellの特徴は、(i) 共感的態度を示す、(ii) 不確定な内容に付与される、(iii) ne よりも共感に特化、である。jaの特徴は「話し手が確信をもって発話するときに使用」されることである。hmの特徴は、「ほのめかしを行う」ことであり、weißteの特徴は、「対話相手に対して強い働きかけを行う」である。これら個別ヴァリエーションの相互行為的機能と、それぞれの語義的意味にも関連性があることが明らかになった。

付加疑問の語義的意味「反応要求」から相互行為的機能「共同性の提示」が表出されることから、語義的意味と相互行為的機能の上位概念として「対話相手に参加を促し、自分との共同性を持つ立場に相手を引き込む」働きが想定できる。この上位概念が機能することにより、発話状況それぞれにおける相互行為的機能が表出されるのである。付加疑問の相互行為的機能と上位概念についての考察から、コミュニケーション上で言語が果たす役割の一端が、上位概念からさまざまな意味の候補を表出することであると論じた。これが実際にコミュニケーション上で表出されることにより、非言語要素によって、複数ある意味候補のどれが表出されるかが決定されると考えられる。

本稿では付加疑問の相互行為的機能と個別ヴァリエーションそれぞれの特徴について明らかにすることにより、相互行為的機能が表出される仕組みと、言語がコミュニケーション上で果たす役割の一端について論じた。